絲綢之路

シルクロード

S I L K R O A D

2012-新春

No.68

●表紙の画および題字は、
故・平山郁夫画伯のご厚意により
ご提供いただいているものです。

平安神宮　2004年

【葡萄唐草模様について】

古代、ペルシャ、コーカサス生まれの葡萄が蔓草と一つになり、西へ、東へ、シルクロードを経て東西の文化を彩る文様となりました。私どもの財団ではシルクロードを中心に、世界の文化に寄与できればと、この葡萄唐草文様をシンボルマークにいたしました。

●シンボルマークデザイン：吉田左源二

公益財団法人
文化財保護・芸術研究助成財団
FOUNDATION FOR CULTURAL HERITAGE AND ART RESEARCH

ティカル国立公園

（グアテマラ共和国）

ユネスコ世界遺産（文化遺産）シリーズ　©UNESCO

九世紀ごろまで栄えていたマヤ文明の巨大都市遺跡。高さ六十五メートルに及ぶ急勾配のピラミッドや神殿など、テオティワカン文化の影響を受けた三〇〇〇もの建築物が、現在は密林となった地域に整然と建築されている。九〇〇年ころ、このマヤ文明の中心都市から人びとが消え去ったが、その理由は今も謎に包まれている。

（一九七九年に複合遺産として登録）

公益社団法人
日本ユネスコ協会連盟

復興元年――東日本の再生を祈願して

理事長
宮田 亮平（みやた りょうへい）

新年明けましておめでとうございます

年頭にあたり、賀詞の交歓は声高らかに行うものと思います。しかし、本年はいささか躊躇を覚えざるをえません。申すまでもなく、昨年、東日本を襲った巨大地震と大津波は多くの国民の胸に癒し難い傷を残しました。被災者の方々のそれは、さらに大なるものだったと拝察いたします。

私自身、復興事業に協力するために、何度か被災地を訪れました。被災直後のことですが、東京藝術大学のボランティア・チームと岩手県大船渡市を訪れたときのことです。少しでもお役に立てば、と演奏会や絵画教室を開きました。時間が刻々と過ぎ、終りに近ずいたころ子供たちが「先生たち、帰らないでください」と叫んだのです。災害の爪痕も生々しい現場の模様が脳裏に深く焼き付いていた身には、彼等の声が何を求めているか、よくわかりました。それだけに心が張り裂けそうな思いに駆られました。

大自然がもたらす災害の前には人一人の力は弱いものです。私たちの祖先は過去において、何度、今回のような出来事に遭遇してきたのでしょうか。きっとその都度、多くの知恵を出しあって危機を克服してきたことと思います。

現在、私どもは東日本大震災によって被害を被った文化財を救う支援事業に取り組んでおります。被災地を抱える各自治体は、復興プロジェクトをいかに遂行するか、という課題に追われ、なかなか被災文化財にまで手が回らないのが実情です。そうした状況もふまえ、私どもは、文化庁と協力しあい、震災直後の四月より「文化財レスキュー活動」に取り組んでまいりました。本年からは、レスキューから修復・保存活動へとシフトしていくものと思われます。とは言え、福島県も含めて被災文化財の実態が全て明らかになったわけではありません。しかしながら、津波の被害をうけた古文書類を中心とした紙の文化財は、一刻も早く修復・保存の処置をとらないと極めて憂慮すべき事態におちいる危険性があります。したがって、現実はレスキュー活動と修復・保存活動は平行して行うことになるでしょう。

被災地における支援は、まず人命第一、そして被災された方の生活安定が第一です。そのためには膨大な予算と時間を要することは当然のことです。物言わぬ被災者である被災文化財についても同じことが言えます。幸い、当財団を窓口として国の内外から多くの個人・団体から義捐金が寄せられてきております。その使途についても、伝統ある祭りが復活できるよう役立ててほしい、貴重な記録である文書の保存に役立ててほしい、等々、浄財を寄せられた方々の想いがこめられたものもございます。もちろん、そうしたお心は十分尊重してまいる所存です。

文化財は、その土地、その土地の人々の矜持でもあります。有形・無形を問わず、代々受け継がれてきた被災文化財を救うことで、被災地の皆さまの心に少しでも希望の光が広がってくれれば、と願ってやみません。そのためにも本年は本格的に被災文化財救済のキャンペーンも積極的に行ってまいりたいと思います。

最後になりましたが、これまでに浄財をお寄せいただいた皆さま方には心より御礼申しあげます。ありがとうございました。どうぞこれからもよろしくお願い申しあげます。また、被災文化財のレスキュー活動ならびに修復・保存活動に御協力賜った関係諸機関の先生方にも心より感謝申しあげます。ありがとうございました。

わが広報誌「絲綢之路」は年三回発行ですが、毎回、東日本大震災に関する記事は掲載してまいります。被災地は時間はかかっても復興・復活すると信じます。その意味でも本年は復興元年と位置づけては、いかがでしょうか。それを支えるのは多くの人々の善意です。「ありがとう」という感謝の気持ちと希望をこめて復興元年を寿ぎたいと思います。

東日本大震災の

被災文化財救済・修復からの新たな取り組み

巨大地震、大津波、そして台風。史上まれにみる大災害に見舞われた日本列島。多くの尊い人命が失われ、人々の貴重な財産が失われた。先祖が残した知の遺産である文化財も例外ではなかった。この痛手からいかにして立ち直るか、被災文化財救済の観点から論ずる。

“Save Our Culture心を救う、文化で救う”プロジェクト立ち上げの文部科学省における記者発表（2011年11月2日）。
ヘンリー・エンジー・ワールドモニュメント財団副理事長（左）、宮田亮平当財団理事長（中）、近藤誠一文化庁長官（右）

文化庁文化財部文化財鑑査官
大和 智（やまと さとし）

すべての被災文化財に救済の手を……

新たな年、平成二十四年を迎えました。文化財保護・芸術研究助成財団におかれましては、わが国の文化財保護、芸術文化の発展にさらに大きなお力を発揮されることを期待いたします。

昨年は日本にとって大変な一年でした。三月の東日本大震災、そして八、九月の台風十二号、十五号による被害は、いずれもわが国の地震、台風による災害史に残るものでした。あらためて日常の生活が実は大きな危険と表裏であることを思い知らされた一年でした。直接大きな災禍を被った被災地の皆様はもとより、その他の地域を含め、いま、わが国全体がこれらの災害からの復旧・復興に全力で取り組まなければならない状況にあります。

なかでも東日本大震災は、文化財保護の分野においても過去にない深刻な被害をもたらしました。国によって指定等され保護されている文化財に限っても、七四四件の被害が報告されています。美術工芸品、建造物、史跡など有形のものはもとより、伝統的な祭礼や芸能といった無形の文化財も、これを支えてきた地域社会そのものが存亡の危機にあるとともに、行事に必要な用具等が失われてしまうなどの被害を受け、継承が困難となる状況に直面しています。

文化庁では、被災した国指定・選定等の文化財の復旧について、平成二十三年度の第三次補正予算で災害復旧補助事業費を確保し、修理事業等に着手しようとしています。また、総務省による特別交付税の中にも、東日本大震災で被災した文化財の修理等に関する経費について、地方公共団体が負担する額の八十%を措置することが決定されています。この交付税措置においては、国指定・選定の文化財のほか、地方指定文化財及び国登録文化財の復旧に係る経費も含まれています。

このように国や地方公共団体によって指定され、一定の保護がはかられているもの、そして公共有のものについては、財政的支援が受けやすいこともあり、今後の修理、復旧は比較的スムーズに行われるものと考えられます。

しかし未指定のものを含めそれ以外の文化財については、財政的にも技術的にも支援が限られていることから、大半が未だ修理、復旧への目処が立っていないのが現状です。これらには個人や民間が所有する地方指定の文化財や国の登録文化財も多数含まれています。

身近な文化財を守る意義

被災した文化財の多くがこのような事情を抱えるなかで、文化庁からの協力依頼に応じて、文化財保護・芸術研究助成財団がいち早く民間からの募金を呼びかけ、特に行政が直接関わり難い未指定を含めた多様な分野の被災文化財の救済に幅広く取り組んでおられるのは、誠に意義深いことです。

すでに、多数の団体、個人が参加する文化財レスキュー事業には、集められた浄財による財政的支援が行われていますが、この活動によって緊急避難されたものの多くは、津波で被災した沿岸部の博物館等に保管されていた古文書や民俗資料、美術品コレクション等の未指定の文化財です。

国指定・選定以外の被災文化財の救済については、阪神淡路大震災後の復旧においても問題となりました。このときの教訓は、指定制度を補完するものとして登録文化財制度をまず歴史的建造物について導入する契機にもなりました。東日本大震災でも、被災した膨大な数の多様な文化財をどのように救済するかが改めて課題となっていますが、とりわけ今回の激烈な大震災の後では、多くの被災地において、まず地域社会、地域コミュニティそのものの復旧・再生から始めなければならず、その際、永く地域で守られ親しまれてきた有形無形の身近な文化財は、指定・未指定に関わらず、人々の心を結びつける紐帯として、地域の復興に大きな役割を担う重要な存在となり得るものと思います。

新たな文化財保護の枠組みの構築へ

東日本大震災復興構想会議の提言である「復興への提言～悲惨のなかの希望～」においても、震災被害や住民避難等で維持が困難となった地域コミュニティの再生のため、文化財の修理・修復を進めることが必要であり、伝統的行事や方言の再興、保存、継承への支援を行うことが求められ、また被災した博物館・美術館・図書館等の再建・充実への支援が望まれる、としています。

文化財保護・芸術研究助成財団では、国や地方公共団体だけではカバーすることができないレスキュー活動や、その後の修復等に必要な財政的な支援を行うため、国内のみでなく広く海外からも寄付を募っており、積極的にキャンペーンを展開するなどして支援の輪の拡大に努めておられます。引き続き行われる文化財レスキュー活動とともに、今後なるべく早く着手しなければならないさまざまな種類の文化財の修理や復旧には、こうした民間の幅広い支援に大きな期待が寄せられるところです。

明治以来現在まで、わが国の文化財保護は永く行政主導で行われてきたこともあって、文化財保護に民間が積極的に加わることは従来あまり見ることができませんでした。しかし一方で、近年文化財の概念が大きく広がり、地域の身近な文化財にも関心が持たれるようになり、また文化財が観光資源等として地域活性化の面からも注目されるようになってきたこともあり、大震災を経験する以前から、文化財保護における官民の連携を含めた新たな取り組み、体制の構築の必要性が問われていたところでもありました。

今年からはいよいよ修理等の具体的な復旧、復興の取り組みが始まります。それは、多くの方々からの支援を必要とする長期にわたる膨大な事業となると思われます。甚大な犠牲をともなった東日本大震災ではありましたが、せめてこれを契機として、わが国において新たな文化財保護の枠組みの構築、具体的な取り組みの進展が見られるようになることを願ってやみません。

日本サムスン社と当財団による修復支援事業の調印式。
尹晋赫（ユンジンヒョク）社長と宮田理事長（2011年9月9日）。

筆者の略歴

昭和二十八年生れ。昭和六十二年文化庁へ、平成十八年筑波大学大学院教授（世界文化遺産専攻）、平成二十年文化庁文化財部参事官（建造物担当）を経て、平成二十三年四月より現職。

東日本大震災の被災地を行く

陸前高田市からの報告

多くの犠牲者をだし、陸中国立公園のシンボルの一つであった美しい緑の松原を根刮ぎ倒し、町を廃墟と化した巨大地震と大津波。この痛手から、今、陸前高田市の人々は復活、復興をめざして決然と立ち上がっています。

財団専務理事
小宮 浩（こみや ひろし）

陸前高田市の悲劇

昨年十一月八日、東京国立博物館の学芸研究部保存修復課の神庭信幸課長の御案内で、岩手県陸前高田市を訪問しました。目的は同市における被災文化財のレスキュー活動の状況視察にありました。

周知の通り、陸前高田市は東日本大震災では甚大な被害を被っております。人口約二万三〇〇〇人。その一割にあたる人々が巨大地震と大津波の犠牲となりました。

太平洋に面する陸前高田市は、白砂青松を文字通り絵に描いたような高田松原で知られる美しい町です。三陸海岸の風光明媚な土地を演出する主役はリアス式海岸です。しかし、陸中国立公園の立役者は津波の襲来によって凶器と化してしまったのです。リアス式海岸では津波が来ると湾の奥では波高が高くなり、大きな被害をもたらします。

大震災から九ヵ月。大津波によって壊滅状態となった陸前高田市は都市機能の多くを失ってしまいましたが、今、再生にむけて着々と歩を進めつつあります。

今回、現地でお世話になったのは、元・陸前高田市立博物館館長の本多文人氏と同館と「海と貝のミュージアム」の主任学芸員を兼ねる熊谷賢氏のおふたり。

瓦礫の処理も進み、震災直後の強烈な被災風景は消えていましたが、住宅も商店街も無い、一見するとフラットな感じの市街地は廃墟というには、あまりにも悲しい光景でした。

陸前高田市の市庁舎も博物館も図書館も、公共機関の多くが海沿いにあります。車を走らせていると道路と海水面が、さほど違わない高さにあることに気づきます。聞けば地震によって、地盤が一メートル近く沈下したためとのこと。

熊谷さんによれば、このあたりを襲った津波は高さが、十～十五メートルだったという。市庁舎も博物館も水没した、と思ってください、という説明に改めて津波の威力を認識した次第です。

熊谷さんは、九死に一生を得た人で、多くの同僚を失っています。また、仮市庁舎でお会いした戸羽太市長さんも奥さまを亡くされておられます。陸前高田市の市民の皆さんは、どなたもこうした事情を抱えられているものと拝察いたしました。

博物館も図書館も内部は震災当時の状況を察するに余りある姿で、胸が痛くなる想いでした。そして、犠牲となられた職員の方々の御霊に哀心より哀悼の意を表させていただきました。

大津波による惨状を語る熊谷賢氏（中央）と本多文人氏（右）。左は東京国立博物館の神庭信幸氏

旧市立生出小学校。レスキュー活動によって被災文化財はここに運びこまれた

旧生出小学校にて

陸前高田市の郊外、山あいの小高い地に旧市立生出小学校はあります。地球温暖化の影響か、十一月の初旬でも紅葉前線の勢力はそれほど強くはありませんでした。

廃校がきまったばかりだった旧小学校の校舎に被災文化財は自衛隊をはじめ、救援者の皆さんの手によって運びこまれました。海水をかぶり、泥にまみれた文化財を洗浄、燻蒸といった応急措置をする作業は大変な根気を必要とします。震災直後の混乱もあって、旧市立生出小学校の校舎内は足の踏み場もないほど被災文化財の山が築かれていました。

レスキュー活動によって、こうした文化財は仕分けもされ、次の修復措置を受ける順番を待つばかりのものもあります。

現在、最も急を要する案件の一つが古文書類を中心とする紙の文化財です。陸前高田市には、仙台藩の統治下にあった頃の支配機構の模様を詳細に記録した「吉田家文書」が残されています。寛延三年（一七五〇年）から明治元年（一八六八年）までの記録が現存しており、大変貴重な歴史資料です。津波によって水損したこうした古文書を救うことは、現地の歴史を救うことを意味します。

同様に歴史の証人ともいうべき石碑なども津波で流失してしまったため、これらの拓本が貴重な存在となってくるわけですが、水分を抜き、塩分を除去しても一度海水に漬かった和紙を黴から守るのは至難の業とのことでした。

文化財を保護する意味

旧生出小学校の保管所では、「海と貝のミュージアム」から救出された膨大な貝の標本の洗浄と整理が行われていました。直径二～三ミリの小さな貝から法螺貝の仲間のような大きなものまで、珍しい貝の標本が保存のための手当てを受けていました。こうした作業を黙々とこなしていく関係者の皆さんの姿に私どもは、ただただ頭を下げるのみです。陸前高田市に限らず被災地では、このような光景が連日続けられているわけですから、被災文化財のレスキュー活動に協力していただいた全国の大学、研究所、博物館、美術館等の研究諸機関の皆さまには心より感謝申しあげます。

旧生出小学校に集められた被災文化財を見ていたとき、係の方から「あの整理用のスチール棚はレスキュー活動の費用で購入させていただきました」と聞かされた瞬間、なにやら熱いものが胸からこみ上げてきました。

また、かつての講堂兼体育館の中には多くの民俗資料が並べられていました。その中で異彩をはなっていたのは、二つの大きな和太鼓。聞けば波間に漂っていたのだという。

陸前高田市では毎年八月七日に「うごく七夕まつり」と「けんか七夕まつり」が行われます。特に後者は勇壮なシーンが展開されるようです。二つの太鼓はその時に使用されるものだとのこと。早く「まつり」が行える日が来るといいんですがね、とは市民の皆さん全員の偽らざる想いでしょう。

東日本大震災がもたらした被害は、原発事故も含めて、すでにあらゆるところで論じられているように甚大なものでした。政府をはじめ、被災地の自治体は人々の生活安定をめざして復興に取り組んでおります。それには巨額の費用と時間を必要とします。その伝で言えば被災文化財の救済に多くの予算を割くことはなかなかむずかしいでしょう。

しかし、被災地の皆さんの心を救い、癒すことも大切なことだと思います。先祖代々から崇敬し、心の拠り所としている神社仏閣、その土地、その土地に伝わる古文書、そして祭り。有形・無形を問わず、傷ついた文化財を救い、失われようとする文化財を復活させることこそ、被災地の皆さんに対する精神的エールであると信じます。それには多くの方々のお力を必要とします。私たちのすすめる事業に御理解と御協力を賜れば嬉しく思います。

多くの人々の協力で被災文化財の整理作業は進められている

市立博物館から陸前高田市のかつての中心部を見る。水道の蛇口が半円形に曲げられている。これだけでも大津波の威力がよくわかる

まるで爆撃されたかのような「海と貝のミュージアム」の内部　【写真・村木茂】

台風十二号による熊野那智大社の文化財の被害状況について

西日本を襲った台風と大雨、そして長雨。ユネスコ世界遺産に登録されている「熊野三山」の一つ熊野那智大社は甚大な被害を蒙った。歴史と多くの貴重な文化財を有する大社に支援の手を……。

熊野那智大社　宮司
朝日　芳英
（あさひ　よしひで）

御本殿（手前より）、第四、第五殿後に土砂流出する

台風の脅威

熊野那智大社は、紀伊山地に位置する和歌山県那智勝浦町那智山に鎮座し、熊野本宮大社（田辺市）・熊野速玉大社（新宮市）とともに「熊野三山」の一社である。当社の創建は、神武天皇東征の折、熊野灘から上陸し、那智山に光輝く大滝（那智の滝）を見て神として祀ったのが始まりとされ、その後、仁徳天皇五（三一七）年に、大滝（那智の滝）から南方約一キロメートル離れた那智山中腹東斜面の現在地に遷し、「大己貴尊」を始め、主祭神である「熊野夫須美大神（伊弉冉尊）」を中心に縁の深い十一社の神々を合せて祀ったお社である。その際、大滝（那智の滝）を「飛瀧大神」として祀ったのが現在の熊野那智大社別宮飛瀧神社である。当社は、長い歴史において熊野信仰の継承とともに数多くの文化財を維持・管理している。

去る平成二十三年九月四日に襲来した台風十二号の影響による大雨・長雨により、当地方は甚大なる被害を蒙り、当社文化財の一部にも多大な損害を蒙った。そこで、当社文化財の被害状況について以下報告する。

本社御本殿の被害状況

当社御本殿は、境内の北方に位置し、東から順に東西にほぼ横一列に配された第一殿（瀧宮）・第二殿（証誠殿）・第三殿（中御前）・第四殿（西御前）・第五殿（若宮）を中心とし、第五殿の西南方に曲折りに第六殿（八社殿）及び御県彦社が東面して並んでいる。各社殿の前面、第一殿東面は瑞垣で仕切られ、御県彦社の両脇にはさらに瑞垣があり三方を仕切った形となっている。瑞垣の各社殿の正面にあたる位置には、計七所の棟門形式の鈴門が設けられている。各社殿が並び建つ現在の特徴である配置構成は、中世の絵巻物や参詣曼荼羅等に描かれた状況とほぼ一致しており、古くからの形式であり大変貴重な建物である。その御本殿は、重要文化財（建造物）・世界遺産にも登録されている。

この度の台風の影響により、境内地南西の社殿裏山において土砂崩れが発生し、第五殿の背面側は、高いところで約二メートルまで、他の社殿も縁下部分が土砂に埋もれた。また境内に流れた土砂により一部瑞垣が倒壊し、鈴門が傾斜した。この他倒木により第五殿の箱棟等が破損した。また、第五殿箱棟に裏山の樹木が倒れこみ、枝先が第四殿の屋根面まで達している。このため第五殿後方の鰹木が一本欠失し、千木も折損した。この他、漏水はしていないが、両社殿の檜皮屋根表面の破損が随所にみられた。

崩落した土砂には一メートル以上の岩石が無数に含まれるが、その多くは石垣際部分で堆積し、社殿や瑞垣に直接的な被害を与えていない。しかし、泥混じりの水が多量に境内を流れており、第一殿・青岸渡寺本堂（当社に隣接）境、第六殿・御県彦社境、御県彦社・宝物殿境の各瑞垣がその圧力により柱及び板壁部分足元が外部に押し出されるように倒壊し、御県彦社鈴門が傾斜した。瑞垣の一部土台材が破損して流出した他、倒れこんだ屋根面を控え柱が突き破るなどの破損が随所にみられる等の損害を受けた。

御県彦社ならびに第六殿瑞垣、土砂流出により傾斜する

別宮飛瀧神社（那智の滝）の被害状況

那智山には四本の渓流があり、「那智四十八滝」と呼ばれる滝がある。その中の一つの滝にあたる「那智の滝（一の滝）」は、別宮飛瀧神社の御神体である。この滝は、三つの落ち口から落ちており、「三筋の滝」とも古くから呼ばれ、幅十三メートル・落差一三三メートルの石英粗面岩の断崖をまっすぐ落下する荘厳な滝であり、名勝・世界遺産にも登録されている。更に那智の滝周辺は史蹟・登録記念物にも登録されている地域でもある。

この度の台風の影響により、那智の滝指定地内にある大木が倒壊し、那智の滝下方の河川に大木が横たわった状態となり、更に増水により多くの流木が流出し、同場所に堆積している状況である。その他、増水により生じた土砂崩落による飛瀧神社境内の一部の流出、拝所舞台部分の土砂崩落による基礎の露出等、多くの損害を受けた。このことにより、川の流れに支障があるだけでなく、これまでの景色を一変し、名勝那智の滝としての景観的価値が損なわれる多大な損害を受けた。

前記の如く当社文化財の一部に甚大な損害を受けたが、現在、文化庁並びに和歌山県を始め関係団体・工事関係者等の協力を得ながら、本社御本殿並びに別宮飛瀧神社境内の復興事業計画に基づき、土砂・岩石・倒木・流木等の撤去及び崩落した箇所の擁壁建設等々の復旧工事を進め、一日も早い復興に努めて参りたいと考えている。完全復興にはまだまだ時間と費用もかかるため、一人でも多くの方々の御支援をお願いし、以上台風十二号による被害状況の報告とする。

別宮拝所舞台へ向かう参道右側（滝側）が大木ごと根刮ぎ崩落する

筆者略歴

昭和八年（一九三三年）佐賀県生まれ。京都国学院卒業後昭和二十九年四月、石清水八幡宮奉職。同三十三年九月、熊野那智大社に奉職、禰宜、権宮司を経て平成十年十一月、宮司就任。同十三年より和歌山県神社庁長に就任（三期務める）。

不思議な そりのあるかたち

元・東京藝術大学学長
芸術院会員
澄川 喜一（すみかわ きいち）

来る五月二十二日、いよいよ世界一の高さを誇る電波塔・東京スカイツリーが開業します。独特の美しさをもつ電波塔の秘密をデザイン監修者の本財団評議員の澄川喜一先生からうかがいました。

美しい「そりのあるかたち」を求めて

昭和二十年（一九四五年）、私は山口県の岩国工業学校（旧制）機械科に入学しました。

戦時中の厳しい時代でしたが岩国を流れる錦川に架る美しい木造の錦帯橋に惚れました。

川幅約二百㍍に架けられた五連のかたちは絵にも描けない不思議な美しさがあり、調べはじめました。

まず数種類の木材を適材適所に使い、ボルトなどで締め付けず、独特な木組みによる「そりのあるかたち」を造り出し自然環境に最も適した造形であることに驚きました。

次に東大寺を調べはじめました、鎌倉時代の遺構である南大門は山口県産の桧が奈良まで運ばれて出来ていることが分りました、そして運慶・快慶作の仁王様像も同材であることを知りました。

また奈良の法隆寺は聖徳太子の縁の寺で立派な五重塔があり千年を越えて立ち尽していることなど、更に法隆寺をはじめ日本独自の木造の遺構には汲めども尽きない知恵と不思議さがあることを学びました。

誰が、どうして、造り上げたのか、何故美しいのか、不思議々々々で夢中になった中学生時代でした。

不思議さこそ魅力の原点ではないかと感じはじめたのが彫刻家を志すきっかけになりました。

芸大在学中、台東区谷中に下宿していた頃のことです。昭和三十二年（一九五七年）の七月六日のことでした。谷中の天王寺にあった五重塔が放火され、巨大な護摩焚のように炎が天に昇りました。

心柱や四天柱や側柱など太い部材は真黒に焼けただれ、正に弁慶が総身に矢を受け、壮絶な姿で立ち尽しているように見えました。

ふだん見ることの出来なかった五重塔の内部構造がよく見えたことを覚えています。忘れられない不思議な出会いでした。

多くの人達が写生をしていました。私もその中の一人でしたが、うまく描けませんでした（横山操さんが名作を残され　竹橋の東京国立近代美術館に所蔵されています）。

私は芸大在学中は平櫛田中教室で塑造を勉強し、卒業後アトリエを持ち木彫をはじめました。

自分の造りたい形を粘土でつくり、その原形を元に木に無理に嵌め込むような作り方をしていましたが、木そのものの美しさや、木の性質を生かす造形を考えはじめました。

彫刻する為に木や石などに接し、それぞれの素材の声を聞こうと毎日仕事を続けつつ手探りで「そりのあるかたち」を求めるようになりました。

世界一の電波塔を手がける

時が経ち野外彫刻のお手伝いが多くなり、美術学部長を拝命した頃でした、東京湾に計画されたアクアラインの換気塔「風の塔」のお手伝いをしました。高さ九十㍍の原型を私がデザインし彩色は、当時の平山郁夫学長が手がけられました。

大型の環境造形のお手伝いがご縁で今日の電波塔をお手伝いすることになりました。

世界一の高さ六百三十四㍍の東京スカイツリーの設計は、世界一の技術を誇る日建設計の優秀なみなさんが担当されました。

私がデザイン監修者を務めることになりました。日本人の知恵と日本人の優れたものづくり精神を世界に示せるチャンスと思いました。

デザインコンセプトは、まず立姿の美しいかたちにしようと思いました。設計のみなさんも勿論同感で、沢山の模型を作られました。

我が国にはかつて木造で立姿の美しい五重塔が多数創建されていました。時を経て戦火や、落雷などでその多くが姿を消しました。それでも近世以前の塔が現在も二十二棟あります。それぞれの五重塔には中心を貫く心柱に四天柱と十二本の側柱が取り巻き、心柱に触れることなく組み上げられる中空の構造をもち、柔軟性のある制震構造になっており、地震や風に耐えているといわれています、地上から五重の屋根がバランス良く積み上げられ、何処から見ても美しく不思議な魅力を持っています。

現在の東京タワーの足元は一辺九十八㍍の正方形に四本足で立ち上がり高さ三百三十三㍍です。

東京スカイツリーは高さ六百三十四㍍で、足元は一辺六十八㍍の正三角形で立ち上がります。

上部に向うに従ってしだいに円形になるようデザインされました。

正三角形で立ち上がり「そりのあるかたち」で延び上がりますから左右対称に見える位置は三地点だけです、眺める場所により、傾いて見えたり膨んで見える「そり」と「むくり」がある表情豊かな不思議な形を持っています。美しいレース編を纏う貴婦人のような立ち姿です。外形はパイプ構造で超一流の溶接工によって組み上げられました。

ランドマークですからシンプル・イズ・ビューティフルでなくてはなりません、また美しい五重塔に負けず劣らぬ魅力ある美しい立姿でなくてはなりません。

構造の中心は五重塔のように直径八㍍の心柱が貫き、外側のパイプ構造には触れていません、最先端の技術を不断に取り入れた見事な設計になっております。

高さ三百五十㍍の第一展望台まで昇るエレベーターは五十九秒で到着します、すべてが純国産です。

正に優れた日本人の知恵による優れたものづくりの世界一のランドマークが完成しました。

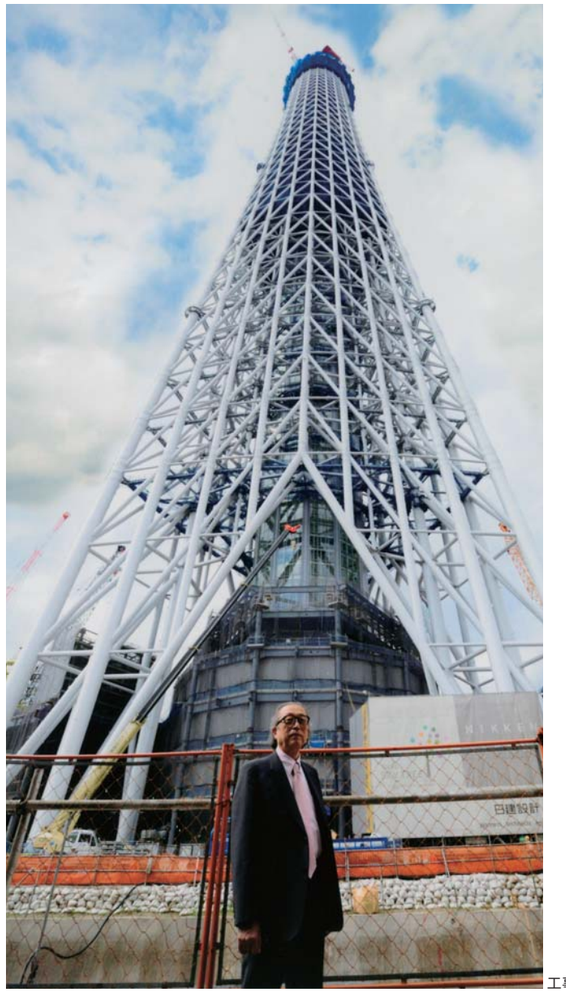
工事中の現場で感じたことがあります。

各種多数の技術者たちが一糸乱れず凛として緊張する空気の中で工事が進行する様子を垣間見て、これこそ日本人のものづくりの精神の坩堝だと心を打たれました。

不幸な大震災がありました。しかし、東京スカイツリーの建設工事に象徴されるように、この日本人の心の強さによって新しい日本を再興するエネルギーが見えたと感服しました。みんなで明るい未来を誇りを持って築き上げねばなりません。

筆者の略歴

一九五〇年　山口県立岩国工業高校　卒業
一九五六年　東京藝術大学　彫刻科　卒業
一九九五年　東京藝術大学　学長（二〇〇一年任期満了）
一九九八年　紫綬褒賞　受賞
二〇〇四年　日本藝術院　会員
二〇〇六年　二〇一一年完成予定の新タワー「東京スカイツリー」のデザイン監修者に就任
二〇〇八年　文化功労者
二〇〇九年　NHK放送文化賞　受賞



工事たけなわの東京スカイツリーにて

第3回

文化事業への貢献

世界には様々な「力」が存在します。政治力、経済力、軍事力……。そうした中で「文化力」が最も平和な力かもしれません。文化を育てあげることは、世界に日本の存在を発信する大きな力になるでしょう。こうした見地から御支援いただいている法人会員の皆様に文化への取り組みをうかがいました。

清水 義昭 しみず よしあき | トヨタ自動車株式会社　社会貢献推進部　企画室　文化活動グループ　グループ長

音楽を通じて地域文化への貢献をトヨタコミュニティコンサート

トヨタは、人々の生活を豊かにする「いい町・いい社会」づくりに貢献したいという考えのもと、芸術・文化に対する支援や活動を行っております。具体的には「地域文化振興」「若手育成」「裾野拡大」を重点に音楽、ダンス、アートマネージメント等、様々な分野で活動を展開しています。

その中で、一九八一年にスタートし、三十年目を迎えたトヨタコミュニティコンサート（以下TCC）についてご紹介いたします。TCCは音楽を通じた地域文化への貢献を目的にトヨタと㈳日本アマチュアオーケストラ連盟（以下JAO）が連携し、各地のアマチュアオーケストラ（以下アマオケ）の公演を支援しているものです。公演は、①プロの指揮者・ソリストとの共演等に地元の方々も参画する「市民参加型」、②福祉施設や離島等への「訪問型」、③障がいのある方等をお招きする「招待型」。の三つの方式で開催し、これまで千三百七十公演を超え、百十万人にご来場いただいております。近年の特徴としましては、地元合唱団や子どもたちとの共演や、行政、学校、商工会等の方々にご協力をいただくケースも多く、TCCが地域行事として根づき、その輪も広がりつつあります。

このたびの大震災に際しては、JAOへの寄付を通じ、被災地への支援企画を全国のアマオケに募ったところ十三団体から応募があり、被災地への訪問や被災され演奏の場を失った団員を招いての共演等、奏者・鑑賞者・支援者が織り成す心暖まるコンサートが続けられています。音楽を通じた絆の強さを改めて認識しました。これからも地域の皆様に、より喜ばれる音楽をお届けしたいと思っております。

京　嘉昭 きょう よしあき | 財団法人アフィニス文化財団 専務理事

日本の音楽界のさらなる発展を願って

日本たばこ産業㈱は、一九八八年に㈶アフィニス文化財団を設立して、クラシック音楽の振興を図っています。

アフィニス文化財団は、オーケストラ助成事業、音楽家の研鑽事業、調査研究事業を三つの柱として取り組んでいます。

オーケストラ助成では、日本のプロフェッショナル・オーケストラの運営支援を行っています。日本には数々のオーケストラがありますが、プロとして活躍しているオーケストラでも演奏収入だけでは経費をまかないきれません。国や自治体、企業等が支援を行っていますが、アフィニス文化財団では、特に「オーケストラのレベルアップに成果の期待できるような企画、日本の音楽界にとって意義のある企画」に助成をしています。

音楽家の研鑽では、毎年八月に「アフィニス夏の音楽祭」を山形と広島で一年ごとに交互に催しています。国内外の一流演奏家を招聘し、日本のプロフェッショナル・オーケストラから選抜された演奏家たちと一緒にアンサンブルを創っていきます。室内楽は、オーケストラの原点です。室内楽の研鑽を通じてオーケストラがさらに向上することを願っています。

調査研究では、二〇〇七年に、十年がかりの委託研究である「日本戦後音楽史」を出版しました。これまで手が着けられていなかった日本の戦後の音楽に光を当てた本格的な研究書です。

アフィニス文化財団では、東日本大震災で被災された方々を応援する演奏活動に特別助成をしています。被災地を訪れた演奏家たちは、口々に熱い体験を語っています。熱烈な歓迎、目頭を押さえる方々、会場を去りがたい気持ち、心と心が通じる体験、演奏する人と聴く人の一体感・・・言葉では表しがたい大きな何かを感じています。

こうした音楽の力をもっと伝えるために、日本たばこ産業㈱はアフィニス文化財団を通じて支援を続けたいと考えます。

助成事業報告から

ベルリンフィルに響く楽の音

東京芸術大学音楽学部教授
澤　和樹（さわ かずき）

二〇〇九年八月にベルリンで開催された国際的なユースオーケストラの祭典、「ヤング・ユーロ・クラシック」の十周年のオープニングコンサートで東京芸大シンフォニーオーケストラは、その記念すべき演奏会で大役を務め、高い評価をいただく事が出来ました。その折に大変お世話になった在ベルリン日本大使館の神余隆博大使より、二〇一一年の日独交流百五十周年の記念行事の一貫として、六月二十八日にベルリンフィルハーモニーのフォワイエでのランチ・コンサートにおいて、芸大の教員と学生による記念演奏をして欲しいとのご依頼がありました。

ベルリンフィルハーモニーのランチ・コンサートは、毎週火曜日の午後一時からの約一時間、コンサートホールのフォワイエで行われており、昼食後のひとときをコンサートホールでの通常の演奏とはひと味違った空間で室内楽が無料で楽しめると言うことで毎回、千人を超える聴衆が集まる人気のシリーズです。東京芸大では、前回の演奏の評価がクラシック音楽のメッカとも言うべきベルリンフィルハーモニー（フォワイエとは言え）での由緒ある演奏会シリーズへの出演につながる事を大変光栄な事ととらえ、更に日独両国の国際交流に寄与できる事として、積極的に参加を検討することになりました。とは言え、二〇〇九年に引き続き、大きな予算規模の企画は大学としては実現不可能でしたので、日本からは教員一名、大学院生二名のみを派遣し、現在、ドイツやスイスに留学中の大学院生に現地参加してもらうことで、予算規模を縮小しつつ、東京芸大として恥ずかしくない演奏水準を確保することを目指しました。又、選曲にあたっては日独交流百五十周年に相応しいものとして、戦前にベルリンフィルを指揮した四人の日本人のお一人である尾高尚忠氏の弦楽四重奏曲第二番、東京芸大音楽学部の前身である東京音楽学校でドイツ人教師からチェロや作曲の薫陶を受けた安部幸明氏のクラリネット五重奏曲、そして日本との交流が始まった百五十年前の一八六一年に完成されたブラームスのピアノ四重奏曲第一番ト短調の三曲を演奏することになりました。ピアノ、管楽、弦楽の各部会推薦で大学院の喜多宏丞（ピアノ）、森島菊乃（クラリネット）を派遣し、ベルリンから宮田英恵（第二ヴァイオリン）、ライプツィヒから長谷川彰子（チェロ）、ジュネーヴから深澤麻里（ヴィオラ）の留学中の三名が現地参加、そして澤　和樹（第一ヴァイオリン）が教員として引率及び演奏にあたることになりました。幸い、（公財）文化財保護・芸術研究助成財団より渡航費用、滞在費用の多くをカバーする助成を頂き、実現出来ることになりました。折角日本からベルリンまで出掛けて行くのに、フィルハーモニーでのランチコンサートだけでは残念と、日本大使館側がご尽力下さり、六月二十七日にはライプツィヒの旧証券取引所、二十八日のランチコンサートの後の夕刻にベルリンの日本大使公邸、そして二十九日にケルンの日本文化会館と三日間で四公演というハードスケジュールではありましたが、大変充実した海外演奏旅行となりました。

各会場共に、聴衆はとても暖かく迎えて下さり、演奏終了後はスタンディングオベイションで私たちの演奏に応えて下さいました。特にベルリンフィルハーモニーでのランチコンサートでは、予想を上回る千二百名もの聴衆が集まり、階段や床に直に座って、或いは柱に寄っ掛かってフォワイエ中央に作られた仮設ステージでの私たちの演奏を、とても集中して聴いてくださいました。フォワイエでの演奏と聞いて、当初、かつて東京駅の丸の内北口で行われていたエキコンのように、用意された若干の座席に座る人以外は、立ち止まってしばらく耳を傾けても、急ぎ足で通り過ぎる人もいるという雑踏の中での演奏を想像していた私にとっては嬉しい誤算でした。邦人による二つの作品は、作曲家がお二人とも生誕百年と言うこととドイツとの関係を意識して選曲したものの、五十年以上前に作曲されたという事で、現代の日本の優れた作曲技法の水準からすると、まだまだ発展途上の段階であり、ドイツの聴衆にどのように受け入れられるかと言う不安がありましたが、演奏後、多くの聴衆の方々から日本の作品が大変興味深かったと言っていただき、とても嬉しく思いました。

演奏中の著者（左）。ベルリンフィルハーモニーのフォワイエにて

三月十一日の東日本大震災の津波とその後の原発事故で未曾有の危機を体験したとき、私は、この状況で六月末のドイツへの旅行は実現出来なくなる、いやむしろ中止すべきではないかとさえ考えましたが、宮田亮平学長や植田克己音楽学部長から「こういう時だからこそドイツに行って日本はしっかりと頑張っているというメッセージを送ってきてください」と背中を押していただきました。ドイツの方々からも多くのお見舞いの言葉や励ましを頂きました。今回の演奏旅行が、日独の友好交流にわずかばかりでもお役に立て、又、芸大の学生たちがこの貴重な演奏体験をもとに今後の活躍に繋げてくれる事を実感いたしました。この公演実現を可能にしてくださいました（公財）文化財保護・芸術研究助成財団にこの場をお借りして心より御礼申し上げます。

Save Our Culture（SOC）"心を救う、文化で救う。

「東日本大震災被災文化財復旧支援事業」スタート

東日本大震災で被災を受けた文化財の救援・修復のための募金活動についてはすでに実施しているところですが、更なる募金を国内外からお願いするため、十一月二日、プロジェクトを立ち上げ記者発表を行い、キャンペーンを開始しました。

本プロジェクトは、本財団とワールド・モニュメント財団（WMF／米国ニューヨーク）が連携し、文化庁及び東京芸術大学の協力を得て、東日本大震災で被災した文化財の復旧活動を行う「東日本大震災被災文化財復旧支援事業」です。

（関連記事四ページをご参照ください）

PICK UP事業

平成22年度（一部23年度）に実施しました文化財の保存修復助成事業の一部を紹介します。

○宮城県仙台市若林区成覚寺の「清海曼荼羅図」（室町時代）の修理について

青海曼荼羅は、当麻・智光両曼荼羅と並ぶ浄土教三曼荼羅の一つで、本紙は横折れが著しく、表具の開閉時の摩擦により折山が擦り切れて料絹の亀裂及び欠失をまねいていました。修理は、解体、剥落止め、洗浄、旧裏打紙除去、旧補修除去、新裏打、補修、補彩などの修理方針を遵守したうえ、作品の形態や状況を考慮し、過剰な処置は行わずオリジナルの保存に努めた解体修理が行われました。

○群馬県太田市安成寺の「木造薬師如来坐像（一五九二年）の修理について

太田市指定重要文化財「薬師如来坐像」は、経年による汚れの付着が顕著であり、左手首が亡失、また、本躰、台座、光背は鼠咬傷が著しく欠損部分が多く見られましたが、修理により仏像の尊容の復元が図られ、地域の貴重な文化財として永く後世に伝えられる存在となりました。

◎奈良県五條市の御霊神社本殿の修理について

奈良県指定有形文化財「御霊神社本殿」は、一六八〇年に造営され、全面に極彩色を施した装飾性豊かな社殿であり、五條地域の中でも大型で、かつ、優れた技法を持つ建造物として位置づけられています。今回、建物基底部の腐朽部分の解体修理、及び剥落の甚だしい極彩色の復原を行い、本来の姿がよみがえりました。

お願い

◎東日本大震災被災文化財の救援と復旧のための募金のお願い

東日本大震災によって被災した文化財の保全にむけて、募金活動を行っています。いただいた浄財は、被災地域の文化財の救援のために活用させていただいております。と共に、今後の修復・保存のために活用させていただきます。皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。募金のお振込は左記の銀行又は郵便局からお願いいたします。

＊

銀行振込（①銀行名②口座番号③名義）
①三井住友銀行　上野支店
②普通　6615496
③(公財) 文化財保護・芸術研究助成財団

郵便振替（①振替番号②加入者名）
①00160―5―123319
②(公財) 文化財保護・芸術研究助成財団
（通信欄に「地震」とお書きください）

なお、募金はクレジットカードからも可能です。詳細は当財団のホームページをご覧ください。

◎賛助会員ご入会並びにご寄付のお願い

当財団では、財団の活動趣旨にご賛同いただき、ご支援いただける賛助会員の法人、個人の方々を募集しています。

法人正会員　年額（1口）　50万円
個人正会員　年額（1口）　1万円
維持会員　年額（1口）　10万円

財団案内および賛助会員入会申込書のご請求、その他お問い合わせは財団事務局にご連絡下さい。

訃報

当財団理事の株式会社電通名誉相談役成田豊様におかれましては、十一月二十日、肺炎のため東京都内の病院でお亡くなりになられました。

同氏には、本財団の理事として長年にわたり、文化財保護と芸術の振興のために御尽力いただきました。ここに生前に賜りました御交誼に深く感謝し、心より御冥福をお祈り申し上げます。

今月の表紙

平山郁夫　平安神宮

平安神宮　2004年

平成十六年（二〇〇四年）に発表された巨匠晩年の代表作である「平成洛中洛外図」を構成する作品の一つである。

京都の神社の中で、平安神宮は最も歴史が浅く、明治二十八年（一八九五年）に平安遷都千百年を記念して、桓武天皇を御祭神として造営された。昭和十五年（一九四〇年）に幕末に崩御された明治天皇の父君にあたる孝明天皇の御神霊を合祀して、社殿も増改築されて今日に至っている。

ここに描かれている応天門（神門）は、平安京大内裏朝堂院の南面正門である。平安神宮は平安京の朝堂院の建物が実物の約八分の五のスケールで縮小復元されている。千年も続いた王城の地の民としての誇り、明治維新で東京へ去った天皇への追慕の念をこめて、京都人は平安京の建物を模した社殿を造営したのである。

編集後記

東日本大震災は悪夢としか言いようのない不幸な出来事でした。時が過ぎ、落ち着きの時間が増すごとに肉親や知人を失った被災者の方々の悲しみは増幅されているのでは、と拝察いたします。お亡くなりになった方々の御霊（みたま）に心よりその御冥福をお祈り申し上げます。

当財団の被災文化財救済の活動も文化庁をはじめ多くの皆さま方の善意に支えられ、順調に進展しております。今年からはレスキュー活動にリンクして修復と保存のための活動に重点が移ります。順調に進展とは申せ、なにぶんにも史上まれにみる大災害だったわけですから、この活動にも膨大な費用と時間がかかります。その意味でも、今年もより一層の御支援をお願い申し上げます。

広報誌「絲綢之路（しちゅうのみち）」（シルクロード）
二〇一二年　新春号　通巻第六十八号
●
★平成二十四年一月二十五日発行
★編集発行／公益財団法人 文化財保護・芸術研究助成財団　事務局 ©
〒110-0007 東京都台東区上野公園十二―五十
電話（〇三）五六八五―二三一一
FAX（〇三）五六八五―五二二五
URL：http://www.bunkazai.or.jp/
E-mail：jimukyoku@bunkazai.or.jp
★印刷　株式会社　東都工芸印刷